

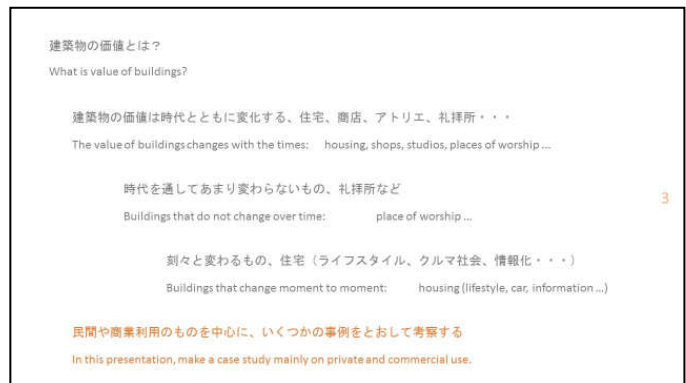
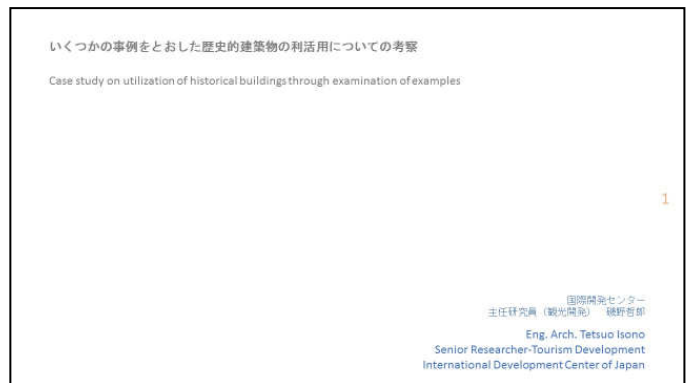
【④カフェ、ブティックホテルなど、歴史的建造物の現代的な利用法】

磯野哲郎（国際開発センター主任研究員）

建築物は、人間の社会経済活動の場のために人工的に作られたもの、であるとも言え、その時代における一定の価値をもつことで存在し、維持され、活用されてきた。価値観が変わった違う時代において、歴史的建築物 (historical buildings but those not historic enough) は、素材や材料の入手が困難、設備が求められる機能を満たせ稲井など、徐々に時代の価値から離れていき、使われなくなってしまふことがある。その場合、物理的な修復を施しても新たな価値が伴わなければ再び使われなくなってしまう恐れがある。

建築物の価値とはそれを所有する人、使う人によって異なり必ずしも普遍的な価値があるわけではない。しかし住宅、商店、アトリエ、礼拝所など建物の目的によっておおよその傾向はあると考えられる。時代を超えて多くの人に共通の価値を保ち続ける建築物は維持され続ける。モスクのような礼拝所は時代が変わってもその価値は変わらない。一方例えば住宅のように、大家族制から核家族へのライフスタイルの変化、車に依存する車社会、通信インフラとデバイスが必要な情報化社会の影響を受けざるを得ないものもある。今日はまとまりのあるものではないがエジプトの人たちにとって近すぎず遠すぎないいくつかの事例を見てもらいスークシラーハの活性化の参考になれば幸いである。

最初にお見せするのはイラン西部の町ザンジャーンのバザールの中にあるハمامを改装したチャイハネである。ライフスタイルの変化からイランでも公衆ハمامの利用は減っている。この事例は元々のハمامに家具を入れ、殆んど手を加えていないので高額な費用も関わらずある意味手軽な再利用方法であろう。ラマダン中の訪問のためバザールもシャッターがおりている店があるが本来ならもっと人が多いことを付け加えておく。



チャイハネには、ハمامの待合室の雰囲気そのまま残っている。番台もそのまま？と思われる。



5

我々は、ラマダン中に訪れたためチャイハネは休業中であった。中央の男性がザンジャー州遺跡観光局のアドバイザー、奥のふたりはテヘランの遺跡手工芸観光庁（ICHHTO）の職員、左の日本人女性はイスタンブール在住のHIS職員。



6

ハمامらしく、クシュティ（本来はミール）と呼ばれる、伝統武道のトレーニングに使われる木製の道具が置いてあった。



7

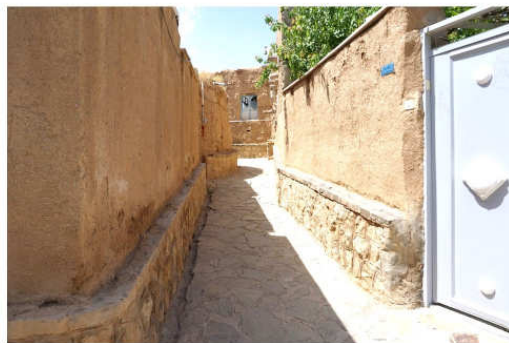
次に紹介するのは、同じくザンジャー州のエコロッジで、ペルシャ語ではブームギャルディと呼ばれる。イラン政府（ICHHTO）は、伝統的なエコロッジ（ブームギャルディ）の普及を推奨しているが、ザンジャー州はブームギャルディの発祥地である。大きな市場のテヘランから300kmの距離の旅行目的地であることから、宿泊需要が見込めることが理由である。ブームギャルディには、政府が認証したロゴと標識が掲げられている。



8

ザンジャーンの州都から少し離れた郊外の歴史的な雰囲気が残る村にある。

村は歴史的な雰囲気を残しており、石畳も整備されている。



9

住戸の入口の扉も趣がある。



10

これが訪ねたブームギャルディの入口。



11

入口をくぐったところ。



12

入り口から入った中庭・囲炉裏、小部屋が塀沿いにある、伝統的な料理や工芸の体験ができる。



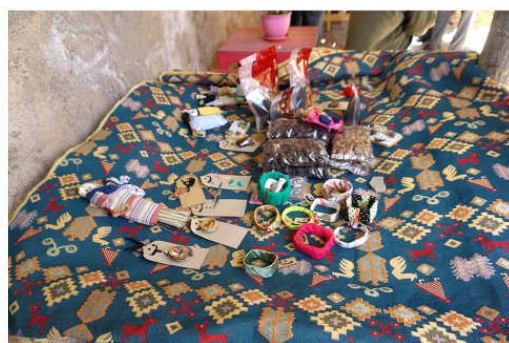
13

壁にはアラベスクのアートも描かれている。



14

ワゴンには、村の人たちが作ったアクセサリー、ナッツ類を並べて販売している。いわゆる委託販売で、売上は提供した村の人に還元される。



15

このブームギャルディのオーナー夫妻。テヘランから移住してきた若いふたり。客の大半はテヘランからの若者の団体とのことである。



16

これは、別のブームギャルディ（エコロッジ）で、よりテヘランに近いガズヴィーン州のアサシン教団で有名なアラムート山にある。ガズヴィーンの町はテヘランから 150km であるが、アラムート山までだと宿泊を伴う観光目的地である。



17

オーナー夫妻（写真中央の 2 人）は、元々この地の出身で、定年を機にテヘランから戻ってきた年配の夫婦。先祖代々からのペルシャ絨毯、伝統的な農具などを展示している。



18

緑豊かな庭にある食堂。



19

シンプルだがモダンに改装された寝室。



20

次は、イラクと国境を接するイラン南西部で、クルド人が多く住むコルデスターン州、ホラマン渓谷ホランマンタクト村。茶色の看板は、常に、遺跡手工芸観光庁の認証した観光村の標識。1984年にこの道路ができるまでは、クルマのない隔離された地域であった。今ではベルシャ語が通じるが、住宅様式、衣装、言語、風習が守られてきた。山の向こうはイラクで、命がけの国境密貿易が盛ん。観光客が来るようになって村の人たちの現金収入の機会が増えてきた。コロナ禍前には、年間60万人の観光客が訪れ、ドイツやオーストリアなどからの外国人も訪れていた。

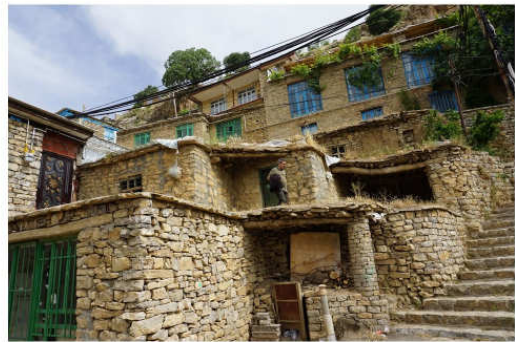
山肌に連なる伝統的な階段状の石造りの家々。

日当たりの良い屋上のテラスでは、村の女性たちが、クルド人の伝統的なカラッシュと呼ばれる履物作りをしている。近寄って作業を見ることはできるが、女性たちの写真撮影を嫌うので、遠景でしか撮影できなかった。

カラッシュのソールは、男性職人の仕事である。カラッシュは、岩山の上下りに適したクルド人男性用の履物である。世界工芸評議会（WCC）の認定を受けている。



21



22



23



24

最後に、一転して、モロッコのマラケシュ、ジャマエルフナ広場に近い邸宅を6部屋のこじんまりとしたブティックホテルに改修したダールソハンを紹介する。よりエジプト人には身近であろう。



25

ダールソハンの屋上はジャグジーとサンデッキに利用されている

1階にあるマグレブ式のサロンにはモザイクタイルがふんだんに取り入れられている。高い人気のブティックホテルであるが、改装には高額な費用がかかる。また、ヨーロッパをはじめとした外国人が顧客であることから、宿泊客に満足してもらうためには、様々な外部の人や会社との連携が必要である。調度品、アメニティなどのサプライヤー、料理、ハウスキーピング、マーケティングなど、様々な分野にわたる。

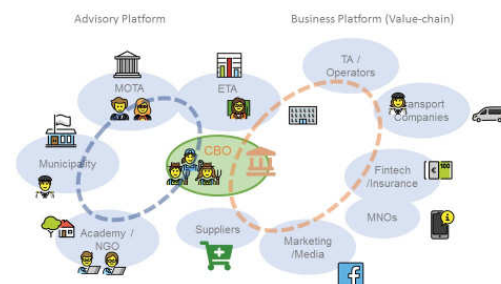


26

歴史的建築物を使った住民による事業を考えた時、2つのネットワークが必要だと言える。ひとつは事業についてのバリューチェーンを構築すること、もうひとつは公的組織との連携体制を作っておくことである。どちらかだけでは事業として成り立たないし、歴史的建築物の保全と活用から離れていってしまう恐れがある。バリューチェーンは、コミュニティの内外にあり、サプライヤーやサービスプロバイダーはコミュニティの中で築いていくことでコミュニティの活性化や雇用の創出に結びつけることができる。公的組織には、観光遺跡省、観光庁、市役所、大学・研究機関・NGOなどがある。以上、まとまりのない紹介であるが、スークシラーハの活性化の参考になれば幸いである。



27



28